

近・現代の中国画と日本画の比較研究

——梅と菊の表現を中心として——

博士後期課程造形表現専攻

于 澎

Yu Peng

序論

本研究は、中国と日本の近・現代絵画の比較に焦点を当てて研究を試みる。中国の絵画研究者は、中国画と日本画の発展の歴史について、それぞれの特徴及び相違点について、大きな関心を抱いているが、これまでに中日両国の近・現代絵画を比較研究した論著も論文も少ない。しかし、論者は中国画と日本画の比較研究を通じて、両国絵画の題材、絵具、素材、構図、技法、色彩などにおける相似性及び差異性を考察し、日本画の独自の造形思考と優れた材料と技法を中国の水墨画と融合させ、新しい具象表現が可能になると考えている。従って、日本画と中国画の比較研究は中国の美術理論と日本の美術理論、そして両者の技法など各側面におけるの架け橋になるだけではなく、現代東洋絵画の可能性を探り出し、中国画の今後の発展にも大きな参考と寄与をするのではないかと考えている。

これらをより具体的に説明するため、本論文は中日両国の花鳥画における梅と菊の表現を取り上げ、研究の中心にする。梅と菊は古代から中日両国の文人や画家たちに愛されてきた節操・気品の象徴としての花であり、梅と菊に関する詩文や書画は中日文化交流の一つ大きな媒介でもあった。それだけに梅と菊をテーマにした数多くの中国画と日本画の鑑賞及び比較研究を通じて、日本画と中国画の特徴がよく理解できるものと考えている。

研究方法としては、本研究は主として絵画作品の構図や色彩などを比較する方法を取る。その比較研究を総括し、その過程で先人達が、日本画と中国画についてどのような工夫、発展をして来たかを伝統的技法や表現材料について研究して、それを自らの梅と菊の絵画表現に生かしながら、創作研究を行った。

第一章 絵画作品に梅と菊を表現する意味と理由 ——歴史、文化の側面から——

本章では、歴史や文化、宗教などの側面から中日両国の人たちが梅と菊を表現してきた意味と理由について研究した。まず、儒教、道教、仏教、民間信仰などの中に梅と菊が含んでいる意味を論述する。日本に渡来した仏教は道教と儒教の真味を吸収し、とりわけ禅僧たちは梅と菊の絵を描くことを通じて、その修行過程を表現していた。中国の多くの詩人や画家は、厳しい寒さの中に花咲く梅と、優雅に、貞節高く、長寿・健康を祈る延年の花である菊とに心を引かれ、そのことが様々の優れた絵画作品を残した理由である。日本では、中国から伝わってきた梅と菊は、その薬用効果や花の持つ精神性などが信仰され、皇族から一般庶民まで広く愛してきた。そして、中日両国の文人画の中に梅と菊を表現する理由について研究した。梅と菊がもつ「清高」「耐寒」「寧折不彎」「清香」などの性質は、文人画家たちの精神と相通することから、中日両国の人たちが非常に愛した花である梅と菊とした絵画の題材も愛され、多くの優れた作品が制作された。

第二章 中日絵画史における梅と菊の表現

第一節 中国絵画史における梅と菊の表現

中国絵画史における梅と菊の表現について、まずは五代（907～960年）から影響を受けた宋代の作品や絵画観などを紹介する。その中で、馬麟（1194～1264年）の梅の諸作品は、中国工筆画（細密画）を表現する梅を題材として早期作品である。一方、文人画家として水墨画梅の代表人物である揚無咎（1097～1169年）は、その後の文人

画画梅の方法について大きい影響を与えた。

元代に入ると、文人画は中国画壇の主流になった。明代（1368～1661年）には元代（1260～1367年）の傾向を受け継いで写意の画法が発展し、墨梅や墨菊の絵画は多数あった。清代（1661～1911年）は、文人画の制作の思想の中に、書や篆刻を根本に置く「書画同派」の作品が多数あり、その時期は筆法を重視し、墨色の変化も豊富であった。

第二節 日本絵画史における梅と菊の表現

日本絵画史における梅と菊の表現について、まず南北朝時代（1331～1392年）の水墨画の代表人物として禅僧画家可翁の「墨梅図」から、室町時代の雪舟、狩野派等の梅と菊の作品の表現を紹介する。そして、桃山時代（1558～1624年）に入ると、狩野永徳（1543～1590年）や長谷川等伯（1539～1610年）など梅と菊を表現する日本障壁画が多数あった。最後に、江戸時代（1615～1868年）は、長い日本の美術史の流れの中でも、他期に劣らず上質な成果をもたらした充実の時代であった。この時代の文化・芸術の世界では、さまざまな分野が自由に交流し合う柔らかな環境も保証されていたのである。この時代では、前期、中期、後期に分けて、それぞれの時期の絵画がどのように表現されたのか、そして代表的な画家の作品例を挙げて紹介した。

第三節 中日絵画史の発展と比較

中日絵画史の発展と変化を比較しながら、近・現代日本画の形成の基礎を解明する。中国の花鳥画、あるいは梅と菊の表現の主流は宋代から清代まで写生から写意の方向へ発展していった。日本の花鳥画は十四世紀の南北朝時代の可翁から後は大和絵と融合して、写生的と写実的な方向へ発展していたのである（表1）。

第三章 近・現代の日本画と中国画における梅と菊の表現と比較

第一節 近・現代日本画における梅と菊の表現

近代日本画の概説や、「日本画」という名称の意味などを考察しつつ、その上に明治時代から大正、昭和、そして今日まで、梅と菊を表現する日本画の代表作品と作家を挙げる。作品例を紹介することによって、近・現代の日本花鳥画の特徴、すなわち、平面性、写実性、装飾性などが明らかになる。

第二節 近・現代中国画における梅と菊の表現

1919年「五四青年運動」以前の中国近代前期の絵画は依然として文人絵画を主流とし、その後、西洋美術が中国画に影響を与えるようになったのである。従って、本研究では中国の近・現代美術を1919年から今日までとして、この時代の梅と菊を表現する作品と作家を紹介する。

表1

		中国画 (宋時代～清時代)	日本画 (室町時代～江戸時代末)
差異	材 料	宣紙、毛筆のみ使用	和紙、金銀箔、泥、筆の使用
	技 法	筆墨の重視、模写の重視	色彩の重視、箔、泥を大量使用
	風 格	写意的、抽象的、素朴的	装飾的、写実的、華麗的
	思 想	文人画思想は主導である	市場化、大衆化
相違	材 料	墨、色、紙、絹、毛筆、膠	
	技 法	線の表現が重要である、画面空白がある。	
	風 格	水墨的、平面的	
	思 想	文人画思想と写意的な意識がある。	
発展概況		写実から写意へ宋時代より写生重視から文人画の写意が主流になった。	写意から写実へ中国の絵画の元に、和様化と洋画風が重ねられ、日本の美と絵画が形成された。

第三節 日本画と中国画の表現方法の比較

1. 画材の比較

2. 絵画技法の比較

3. 日本画の「塗る」と中国画の「かく」

中国では、絵画を論じる際、書道を忘れることができない。書と絵画は、例えるなら双子の兄弟のようなものである。このことを「書画同源」という。

日本画では、筆、平筆、連筆、刷毛を使用して絵を描く。この点から日本画の場合は「塗る」「塗ると描く」の両方で完成することとなる。このことは、西洋画でも同じ事が言える。現代の日本画の主流である厚塗りは、背景などの空間意識、厚みなど、西洋画に影響を受けたところも多く、「塗ると描く」が一層顕著に表れている。

②日本画の岩絵具の置き方と中国画の墨分五色、随類附彩

現代の日本画では、絵を形作る上で「絵肌」が非常に重要な意味を持っている。これは、種々の素材が関係している。例としては、画面を立てかけて描く、盛り上げ絵具を使用するなどである。つまり日本画では、岩絵具本体の素材の美しさを重要視しているのである。

一方中国画では、色彩学上、光の概念が少なく、非色彩的な「墨、白、灰」の三段階の黒を用いる。「墨」の場合は、濃淡の変化があり、これが赤、黄、青、藍、紫、の五色の感じが表現できる。絵具は少なく使う。これを絵の六法の一つである「随類附彩」という。中国画の重視する点は、墨韻の表現である。中国画の色彩は、今日に至るまで西洋の色彩学、厳密な色彩基準に拠ることなく物に対して分類して色彩を塗ることにする。「随類附彩」の原則のもとでは、色彩も「神」を表現する要素となる。表面上の色相は重視しない。

③日本画の朦朧体と中国画の線の芸術

朦朧体画風で描いた菱田春草と横山大観などは線描を用いず空刷毛のぼかして空気や光を表現しようとした。この描法は、当時の日本画に革新をもたらした点で評価されている。

中国画から色彩を取ると、そこに残されるのは

点と線と面の結合、そして線自身の変化である。これらの点・線・面は当然筆によって描き出されたものであり、画家がどのように筆を駆使して必要な形の描写にたどり着いたかがわかる。歴史上、中国絵画を論ずる際の最も基本的な評価の軸は「用筆」と「用墨」の二つである。つまり中国絵画及び書法で言う筆線は、決して幾何学で言うところの「線」芸術ではないということである。

④日本画の箔泥の使用と中国画の「余白」と「題跋」

東洋画においては、余白は空間の同義語ではないと考えられる。空間は物と物との間にある具体的な空間で、そこには色々ものが見えたり、置かれていても一向に差し支えがないし、東洋画あるいは日本画の場合、余白は物と物との間の現実の空間ではない。余白は現実に存在しないが、描かれている対象を厳然と支えている不思議な空間である。中国画家にとっては、余白を文字通り無彩色の白い紙のままに残して表したりする作品が多数あり、それが重要である。中国画は白と黒の処理に注意する必要がある。つまり余白とそうでないところの関係の処理は、筆を下ろす前にある程度考え、仕上げの時にも注意する必要があるということである。さらにその余白の所は題跋を書くところである。

3. 日本画と中国画の構図の比較

①相似点：今日の構図の平面性とは、平面の強い東洋の絵画空間に遠近表現を導入した構図といえる。

②差異点：中国画には「余白」技法の比較にあるという表現があり、これも中国画の極めて重要な構図として挙げられるが、今日の日本では、西洋画と同じように画面の全てに描く。この点に差異が見られる。

4. 日本画と中国画の色彩の比較

中国画は、水の加減により濃淡のグラデーションに無限の変化をもたらすことができる「墨」という東洋独特の素材を重視し、色彩はその次となる。墨と色彩を組み合わせた画と言われる。この

場合は色彩と墨の相互関係も大切になってくる。この点において重視されるのは、「墨は色を妨げず、色も墨を邪魔しない。つまり、色の中に墨があり、墨の中に色がある。」という原則である。これは、両者が互いに補色し合い良さを引き立て合うという原理を表している。

日本画の絵具を代表するものは岩絵具である。絵具の粒子の形の違い、大きさの不揃い、不純物の混入などが微妙な発色の美しさを生み出している。

5. 近・現代の日本画と中国画における梅と菊の表現風格について

(1) 近・現代の日本画における梅と菊の作品の特徴

①平面性、装飾性による図案式風格。

絵具などの材質の違いもあるが、対象的な表現も写實的に徹した方法にはいたらなかった。むしろ装飾的、図案式な平面を生かした表現が好まれたのである。

②写生的、写實的による梅と菊の生命力を追求する。

近・現代の日本画は、西洋美術の刺激を受け、写生と写實を重視し、追真的、細密な表現と、岩絵具による質感の再現にひたむきに向かっていた点で共通している。さらに、写實を超えて、物の生命力を表現している

③朦朧的、神秘的主観意識を用いる。

西洋的な空間の表現と結び合う光の意識がとくにまさり、既存の描線の脱化がはかられた「無線描法」が、残っている。この表現方法を朦朧体という。

④具象的表現と抽象的表現を合わせる現代感である

(2) 近・現代の中国画における梅と菊の作品を解明するため、以下の特徴を挙げる。

①平面性、自然性。

②写意的、写實的、画家の主観意識を表現する。

③筆墨を重視、線の表現。

歴史上に、中国絵画を論ずる際の最も基本的な評価の軸は、「用筆」と「用墨」の二つであった。筆の先には、常に糸状の長い線が生れるので、多くの芸術家が中国絵画はすなわち線の芸術であると考えている。

④抽象的表現と具象的表現を合わせる澆墨画等。

近・現代の中国画の作品を見ると、抽象的表現と具象的表現を結合する作品が多く見られる。この中には、澆墨画や、澆彩画など色々な作品がある。中国画の画家たちは、絵の新鮮感を出すために、画材を改進したり、西方絵画の方法を借りたりして様々な方法を試みた。

表2

	近現代日本画梅と菊の表現風格	近現代中国画梅と菊の表現風格
①	① 東洋絵画、特に平面性を持つこと。また、「散点透視」という方法を用いる	
	② 線と水墨を重視している	
	③ 写實的の風格の表現する作品が多数である	
②	① 日本画の平面性は、色彩によって構成されている	中国画の平面性は筆墨の点・線・面の組み合わせである
	② 日本画の中で、線と水墨を重視し、伝統的である	中国画の中で、線と水墨を重視し、近現代の絵画を主流としている
	③ 日本画は写生と写實が非常に重要である	中国画は写生と模写の両方ともに重視し、写實は写意と融合することである
③	① 日本画は装飾性や図案的な風格を重視する	中国画は「意境」を重視し、自然性も發揮する
	② 現代日本画の色彩は、一番重要な表現方法である	中国画の筆墨は、一番重要な表現方法である
	③ 日本画は朦朧感、神秘性を用いる	中国画は墨の濃淡、写意を表現される
	④ 日本画の抽象的な表現は、描くものを誇張することと澆彩という方法である	中国画の抽象的な表現方法は墨線の組合せと澆墨という方法である

(3) 近・現代の日本画と中国画における梅と菊の表現する風格の比較 (表2)。

第四章 現代東洋絵画における新しい具象的表現の試み

——梅と菊の表現を中心にして

近・現代の日本画と中国画の梅と菊の表現についての研究の結果として、自分らしい現代東洋絵画の新しい絵の表現を試みたのである。自分の作品製作の意図、方法、更に東洋絵画の将来の発展の可能性を探求して行きたいと考える。

第一節 製作意図

伝統の継承や自分の美意識を表現し、そして制作対象がもつ生命力と人間の心を伝えようとする意図を絵の中に表現したい。伝統の継承について、作品「白梅と鶯」を制作した。梅と鶯は、日本と中国の文化や芸術の中に、いつも表現される題材である。昔の梅や鶯に関する美術品や絵の優れた作品の精神、技法、画材を考察して研究しながら、新しい梅の絵画を表現したいと思った。

そして、東西にとらわれず、中国画や日本画と洋画の中のあらゆる傑作を鑑賞、研究することによって、現代人の美意識と融合させた私の新しい美意識を築き出そうとしている。自己の作品の製作は、梅や菊という古い題材を新しい現代感、世界感の美意識を表現したく、2005年2月に作品「華」を完成して、第40回日春展に入選。

また、芸術は生命力と心の表現であると思っている。それによって、自作の「白梅と鶯」の絵中に、枯れた草を描いた。この枯れた草の茶色っぽい寂しい色の中には、新たな生命力が宿っている。この枯草は春の白梅と鶯と対比して、大自然の新しい生命力の強さを表現したいと思った。この作品は2005年第2回奈良県万葉日本画大賞展に入選した。更に、「傍徨」という作品の中、秋草に題材として、黒い犬を入れて生きている人生の道と秋草の強さと美しさをも表現したいと思った。この絵は、「第35回日展」で入選した。

第二節 製作の過程と方法について

本論文は、東洋絵画における日本画と中国画の比較を中心とした研究であるので、その目的の一つは、日本画と中国画の中で、優れた点を勉強して、さらに中国画の水墨と日本画の岩絵具の美しさを融合しながら、新たな東洋絵画を表現したいと思っている。本節では、「白梅と鶯」と「華」の製作過程や、作品の構図と色彩の特徴と表現技法などを説明する。

結論

本研究は梅と菊を中心として、近・現代中国画と日本画の比較研究をし、中日両国絵画の中の梅と菊の構図や色彩、特徴などをそれぞれ比較して、論じてきた。今後はこの研究の成果を生かし、具体的に作品を制作する時、まず日本画と中国画の素材や技法を巧みに用いて、梅と菊を表現し、伝統の中から優れた表現と特色などを学習し、吸収したい。その上で、新しい表現を試みる熱意を持ち、紙、墨、岩絵具、膠、水等の画材を使用し、線、余白、平面性、装飾性、水墨の感じと朦朧体、抽象画の構成と澆彩、澆墨などの技法を用いて、新しい東洋絵画の作品を制作し続けていきたい。今後も中日絵画の風景、人物、花鳥などを題材にして、研究と制作を続けたいと思っている。

目次

序論

一.比較研究の理由

二.研究方法

三.研究目的

四.本研究の構成

第一章 梅と菊を表現する意味と理由——歴史、文化の角度から——

第一節 儒教、道教、佛教、民間信仰など

第二節 中国人の梅と菊

第三節 日本人の梅と菊

第四節 文人画の梅と菊

第五節 小 結

第二章 中日絵画史における梅と菊の表現

第一節 中国絵画史における梅と菊の表現

1. 宋時代
2. 元時代
3. 明時代
4. 清時代

第二節 日本絵画史における梅と菊の表現

1. 南北朝時代
2. 室町時代
3. 桃山時代
4. 江戸時代

第三節 中日絵画史の発展と比較

第三章 近現代の日本画と中国画における梅と菊の表現と比較

第一節 近現代の日本画における梅と菊の表現

第二節 近現代の中国画における梅と菊の表現

第三節 日本画と中国画の表現方法の比較

1. 構図、技法、色彩、画材とは——定義とその内容——

2. 日本画と中国画の画材、構図、技法、色彩の特徴と比較

3. 近現代の日本画と中国画における梅と菊の表現その風格について

第四章 現代東洋絵画における新しい具象的表現の試み——梅と菊の表現を中心として

第一節 製作意図

1. 伝統の継承
2. 私の美意識について
3. 生命力と心の表現

第二節 製作の過程と方法について

1. 画材について
2. 技法と製作プロセスについて
3. 構図と色彩について

第三節 製作の感想及び体得

結論

謝辞

註

参考文献

図版目録

参考文献

1. 『中国の愛の花ことば』中村公一著・(株)草思社発行・2002年10月30日出版
2. 『ものと人間の文化史92-1・梅Ⅰ』有岡利幸著・財団法人法政大学出版局・1999年11月1日初版発行
3. 『ものと人間の文化史92-1・梅Ⅱ』有岡利幸著・財団法人法政大学出版局・1999年11月1日初版発行
4. 『水墨画法第三巻一画菊』藤原楞山著・株式会社二玄社出版・昭和57年4月10日発行
5. 『水墨画法第四巻一画梅』藤原楞山著・株式会社二玄社出版・昭和57年4月10日発行
6. 『日本の文様1・菊』相賀徹夫発行・株式会社小学館出版・昭和61年4月20日発行
7. 『日本の文様7・梅』相賀徹夫発行・株式会社小学館出版・昭和62年5月1日発行
8. 『道教の世界』窪 徳忠著・株式会社学生社出版・昭和62年7月25日発行
9. 『神・仏と日本人』望月信成著・株式会社学生社出版・昭和62年6月10日発行
10. 『植物ことわざ事典』足田輝一編・株式会社東京堂出版・1995年7月20日発行
11. 『日本絵画史図典』山根有三監修・株式会社福武書店出版・1978年10月20日発行
12. 『日本の文様3・梅』中島泰之助・光琳社株式会社出版・昭和45年12月20日発行
13. 『日本の文様1・菊』中島泰之助・光琳社株式会社出版・昭和45年3月20日発行
14. 『特別展一花』東京国立博物館発行・美術出版デザインセンター製作・平成7年10月10日発行
15. 『東洋の美学』水尾比呂志著・株式会社美行出版社・1963年8月20日発行
16. 『アジア・美の様式(上)』八尾正博発行・有限会社連合出版社出版・1989年10月5日

- 発行]
17. 『中国絵画史研究』 島田修二郎著・中央公論美術出版社出版・平成5年3月25日発行
 18. 『日本の水墨画』 東京国立博物館編・第一法規出版株式会社出版・平成元年7月25日発行
 19. 『中国絵画史』中 之一（南宋・遼・金）図版・鈴木敬著・株式会社吉川弘文館出版・昭和59年3月20日発行
 20. 『中国絵画史』中 之二（元）図版・鈴木敬著・株式会社吉川弘文館出版・昭和59年3月20日発行
 21. 『中国絵画史』下（明）図版・鈴木敬著・株式会社吉川弘文館出版・昭和59年3月20日発行
 22. 『現代日本素描全集④ 速水御舟』速水御舟・倉本妙子著・株式会社新集社出版
1992年9月30日発行
 23. 『室町時代の狩野派—画壇制覇への道—』京都国立博物館編集・中央公論美術出版・1999年4月15日発行
 24. 『日本南画史』山内長三著・瑠璃書房出版・昭和56年1月25日発行]
 25. 『日本画誕生』近藤啓太郎著・株式会社岩波書店出版・2003年4月24日発行
 26. 『近世日本画の研究』土居次義著・株式会社美術出版社・昭和45年11月1日発行
 27. 『原色日本の美術 第11巻 水墨画』米沢嘉圃・田中一松著 株式会社小学館出版
1970年4月20日初版発行
 28. 『原色日本の美術 第19巻 南画と写生画』吉沢忠著 株式会社小学館出版 1969年2月20日初版発行
 29. 『原色日本の美術 第30巻 近代の日本画』河北倫明著 株式会社小学館出版 1972年8月15日初版発行
 30. 『原色日本の美術 第14巻 宗達と光琳』山根有三著 株式会社小学館出版 1969年7月10日初版発行
 31. 『日本水墨名品図譜第二巻 水墨画の展開』海老根聡郎編集・毎日新聞社出版・平成4年9月8日発行
 32. 『日本水墨名品図譜第三巻 雪舟と友松』田中薫編集・毎日新聞社出版・平成4年12月18日発行
 33. 『日本の花鳥画1 明治・大正編（Ⅰ）』細野正信監修 株式会社京都書院出版 昭和55年9月20日発行
 34. 『日本の花鳥画2 明治・大正編（Ⅱ）』細野正信監修 株式会社京都書院出版 昭和50年11月20日発行
 35. 『日本の花鳥画3 昭和編（Ⅰ）』細野正信監修 株式会社京都書院出版 昭和56年2月25日発行
 36. 『日本の花鳥画6 別巻』細野正信監修 株式会社京都書院出版 昭和56年11月30日発行
 37. 『黄金ととき 桃山絵画』京都国立博物館編集・株式会社思文閣出版・1999年3月25日
 38. 『日本美術を見る眼』高階秀爾著 株式会社岩波書店出版 1991年11月27日発行
 39. 『絵画の知識百科』島田紀夫監修 株式会社主婦と生活社出版 1998年2月23日発行
 40. 『「カラー版」東洋美術史』前田耕作監修 株式会社美術出版社 2000年2月10日発行
 41. 『画文集・万葉の花』岡信孝・那波多目功一・大矢紀著 日本放送出版協会 2002年12月25日発行
 42. 『光琳画の秘密』大谷満著（株）芙蓉書房出版 1999年10月30日発行
 43. 『日本美術 傑作の見方・感じ方』田中英道著 PHP研究所出版 2004年7月2日発行
 44. 『やさしく読み解く日本絵画——雪舟から広重まで』前田恭二著 株式会社新潮社出版 2003年8月25日発行
 45. 『洋画と日本画 近代の美術』日本美術全集22』高階秀爾・陰里鉄郎・田中日佐夫編著 株式会社講談社出版 1992年4月24日発行
 46. 『巨匠の日本画「4」 菱田春草』河北倫明・

- 平山郁夫監修 株式会社学習研究社 1994年9月1日発行
47. 『現代の日本画「11」加山又造』加山又造・岩崎吉一著 株式会社学習研究社 1991年3月1日発行
48. 『日本美術の再検討』矢代幸雄著 株式会社ペリかん社 1987年6月15日発行
49. 『日本水墨名品図譜 四 狩野派と琳派』河野元昭・田中薫編集 毎日新聞社 平成5年3月31日発行
50. 『日本水墨名品図譜 五 蕪村・大雅の時代』河野元昭・田中薫編集 毎日新聞社 平成5年7月15日発行
51. 『中国美術史——日本美術の源流——』小杉一雄著 株式会社南雲堂 1986年4月11日発行
52. 『日本水墨名品図譜 一 水墨画の成立』海老根聰郎・田中薫編集 毎日新聞社 平成5年10月15日発行
53. 『日本の美術23巻 文人画』米沢嘉圃・吉沢忠一著 株式会社平凡社 昭和41年4月30日発行
54. 『日本の近代美術2 日本画の誕生』青木茂・酒井忠康著 株式会社大月書店 1993年6月9日発行
55. 『絵の材料と技法』C・ヘイズ著 北村孝一翻訳 株式会社マル社 1980年4月22日発行
56. 『日本絵画史図典』山根有三監修 株式会社福武書店 1987年10月1日発行
57. 『昭和の美術第一巻 元年～10年（1926～1935）』堀田進弥編集 毎日新聞社 1990年1月30日発行
58. 『水墨画の巨匠「第九巻」』梅原猛・辻惟雄著 株式会社講談社 1994年11月21日発行
59. 『特別展図録・日本の水墨画』東京国立博物館編 第一法規出版株式会社 平成元年7月25日発行
60. 『誰にもできる・名画の技法・水墨画』林功著 日本経済新聞社 1989年9月25日発行
61. 『創造の小径Ⅰ——作品と評論でよむ美術家の制作過程』田中日佐夫著 株式会社美術年鑑社 1993年3月発行
62. 『創造の小径Ⅱ——作品と評論でよむ美術家の制作過程』田中日佐夫著 株式会社美術年鑑社 1993年5月発行
63. 『写実の系譜、——「絵画」の成熟1930年代の日本画と洋画』東京国立近代美術館 1994年10月発行
64. 『近代日本画 産声のとき——岡倉天心と横山大観・菱田春草——』児島孝著 株式会社思文閣出版 2004年8月20日発行
65. 『すぐわかる琳派の美術』仲町啓子監修 株式会社東京美術 2004年8月20日発行
66. 『現代の水墨——“墨”の創造と可能性の展開』小林格史編集 株式会社大日本絵画 1983年12月16日発行
67. 『明治・大正から昭和へ「近代日本画の歩み」展図録』朝日新聞東京本社企画部編集 朝日新聞社 1979年11月発行
68. 『第380号思文閣墨蹟資料目録——屏風特集——』株式会社思文閣 2004年2月発行
69. 『第386号思文閣墨蹟資料目録——屏風特集——』株式会社思文閣 2004年8月発行
70. 『古今屏風逸品図録 第三集』株式会社思文閣 2004年12月発行
71. 『現代日本の美術 下村観山／川合玉堂』後藤茂樹編集 株式会社集英社 1977年3月10日発行
72. 『東京国立近代美術館所蔵 近代の名作 日本画・洋画・版画・彫刻』東京国立近代美術館 2000年4月発行
73. 『原色図典 日本美術史年表』太田博太郎・山根有三・河北倫明監修 株式会社集英社 1986年7月9日発行
74. 『図解・日本画の伝統と継承——素材・模写・修復——』東京芸術大学大学院文化財保存学日本画研究室編集 株式会社東京美術 2002年3月10日発行

75. 『「日本画」用具と描き方』堀川えい子著
株式会社美術出版社 1995年10月31日発行
76. 『美と創作シリーズ 日本画を学ぶ! 静物写生から本画制作日本画の用具用材』東京造形芸術大学編 株式会社角川書店 1998年5月20日発行
77. 『美と創作シリーズ 日本画を学ぶ" 花鳥・風景・人物の本画制作』東京造形芸術大学編 株式会社角川書店 1998年5月20日発行
78. 『特別展花』東京国立博物館編集 1995年10月発行
79. 『吉祥図案解題』野崎誠近著 株式会社平凡社 昭和3年5月発行
80. 『日本の文様(1) 菊』西村兵部・吉田光邦・河原正彦著 光琳社出版株式会社 1970年3月20日発行
81. 『日本の文様(3) 梅』西村兵部・吉田光邦・河原正彦・水尾比呂志・元井能・吉村元雄著 光琳社出版株式会社 1970年12月20日発行
82. 『若冲——水墨画の巨匠第九巻』梅原猛・辻惟雄著 株式会社講談社 1994年11月21日発行
83. 『写梅百家』劉光祖・王林編 黒龍江美術出版社 1997年3月
84. 『花鳥画史話』郭廉夫著 江蘇美術出版社 2001年6月発行
85. 『名家画菊花』河北美術出版社編集出版 2002年1月発行
86. 『工筆花鳥画技法』邵傳安著 湖南美術出版社 1990年5月発行
87. 『画菊要訣』伊石著 江蘇美術出版社 2000年8月発行
88. 『現代重彩画技法』張小鸞著 北京工芸美術出版社 2003年7月
89. 『梅譜——花鳥画譜従書』河北美術出版社編集出版 1997年7月発行
90. 『名家画梅花』河北美術出版社編集出版 2002年1月発行
91. 『中国基礎入門画梅要訣』陸越子著 江蘇美術出版社 2000年8月発行
92. 『中国・中国美術学院中国画系花鳥画工作室』馬其寬編集 河北美術出版社編集出版 2002年1月発行
93. 『百傑画家・房新泉作品精選』中国美術家協会 遼寧美術出版社
94. 『中国当代名家画庫——梅花精選』天津楊柳青画社 2005年1月発行
95. 『中国画基本原理与方法——万象之根』畢建畢著 河北美術出版社編集出版 1997年8月発行
96. 『中国画構図大全』朗承文著 浙江人民美術出版社 2002年3月発行
97. 『菊花白描図集』徐峰著 北京工芸美術出版社 1999年7月
98. 『文化月刊——2004美術新聞』江繼蘭主編 文化月刊社 2005年2月発行
99. 『日中近代の比較』馬家駿・湯重南著 株式会社六興出版 1988年7月30日発行
100. 『中国画法研究』呂鳳子著 上海人民美術出版社 1961年6月発行
101. 『中国書画與文人意識』陳滯冬著 吉林教育出版社・吉林省新華書店 1992年6月発行
102. 『古典に学ぶ水墨画3 墨梅篇』王耀庭編 株式会社二玄社 1996年10月5日発行
103. 『中国伝統水墨画学習従書 墨菊篇』王耀庭編 吉林美術出版社 2004年4月発行
104. 『近代中国絵画』鶴田武良著 株式会社角川書店出版 1974年6月20日発行
105. 『釣魚台国賓館美術集錦』釣魚台国賓館管理局 株式会社小学館出版 1997年7月1日発行
106. 『現代日本の花鳥画(4)』増田武文編集 株式会社京都書院出版 昭和62年9月15日発行
107. 『現代日本の花鳥画(5)』増田武文編集 株式会社京都書院出版 1993年9月1日発行
108. 『世界の中の日本絵画』平山郁夫・高階秀爾著 美術年鑑社出版 1994年5月1日発行

- 109.『日本障屏画名品選』村瀬実恵子著 株式会社岩波書店出版 1992年2月28日発行
- 110.『アート・トップ NO203』小針代助発行 株式会社芸術新聞社出版 2005年5月20日発行
- 111.『美術手帖NO864』株式会社美術出版社 2005年5月5日発行
- 112.『日本画の制作』三谷十糸子著 株式会社美術出版社 1975年4月10日発行
- 113.『日本画の技法と制作』上田臥牛著 株式会社日貿出版社 1981年3月20日発行
- 114.『花を描く』林潤一著 株式会社同朋舎出版 1994年5月30日発行
- 115.『野の花を描く』川島睦郎著 株式会社同朋舎出版 1994年1月30日発行
- 116.『日中文化交流史叢書第7巻 芸術』上原昭一・王勇著 株式会社大修館書店出版 1997年5月20日発行
- 117.『花鳥画の魅力と技法』韓_著 有限会社露満堂出版 1998年10月16日発行
- 118.『江戸の画家たち』小林忠著 株式会社ペリかん社出版 1987年1月10日初版発行
- 119.『近代美術事件簿』瀬木慎一著 株式会社三玄社出版 2004年4月28日発行
- 120.『巨匠の日本画[2]横山大観』監修：河北倫明、平山郁夫 本巻編集 細野正信 株式会社学習研究社出版 1993年12月1日発行
- 121.『巨匠の日本画[2]横山大観』監修：河北倫明、平山郁夫 本巻編集 福田徳樹 株式会社学習研究社出版 1994年3月1日発行
- 122.『現代の日本画[3]福田平八郎』福田平八郎、島田康寛著 株式会社学習研究社出版 1991年6月1日発行
- 123.『現代の日本画[9]高山辰雄』高山辰雄、佐藤直司著 株式会社学習研究社出版 1991年5月1日発行
- 124.『日月星辰——高山辰雄展2001』丸栄堂編集 2001年10月発行

博士论文中文要约

本论文以中日两国的近现代绘画的比较研究为研究焦点，通过中国画和日本画的比较研究，考察两国绘画的题材、颜绘具、素材、构图、技法及色彩等各方面的相同点和差异点、尝试着将日本画的独特的造型思考、材料及技法与中国水墨画相融和，寻求扩展新的具象表现的可能性。

为了更具体地进行比较，本论文将中日两国的花鸟画中的梅和菊的表现作为研究的中心。自古以来，具有清雅、高洁秉性和节操的梅和菊就是深受中日两国的文人和画家喜爱的表现题材，同时梅和菊也是中日文化交流的一大媒介。因此，通过对这些作品的鉴赏及比较，可以更深刻地理解中国画和日本画的特征。

本论文的构成如下：

第一章，从历史、文化、宗教等角度来分析中日两国人民对梅和菊的艺术表现意义和表现理由。

第二章，则进一步研究中日两国绘画史上以梅和菊为题材的代表作品和代表画家，通过比较中日绘画史的发展和变化，阐明近现代日本画形成的基础。

第三章，是本研究的重点，考察并论述了近现代日本画和中国画中梅和菊的表现，并从画材、技法、构图、色彩等方面对两国绘画的表现方法进行比较。

第四章，通过比较近现代日本画和中国画关于梅和菊的表现，我尝试创作了以梅和菊为题材的作品，在本章，详细介绍了各作品的创作意图、创作过程和方法、作品的构图及色彩的特征、表现技法及创作后的感想。

通过该比较研究，我衷心希望能够在中美艺术理论和日本美术理论研究之间架起一座桥梁，而且希望能够为现代东方绘画提示出一个新的发展方向，同时也为中国画今后的发展提供一个良好的参考。